

---

# 矛盾恋愛

椎名 めぐみ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

矛盾恋愛

### 【Zマーク】

Z9914G

### 【作者名】

椎名 めぐみ

### 【あらすじ】

一度も告白を断られた事の無い男と、一度も告白を受け入れた事の無い女。交わる筈の無い二人が交わった時、その結末の形は。

## 事の予兆はシンクロニーティ

昔々、遠い昔。どこかの国の行商人。

旅行く先々で行商人は、自慢の商品を携えて声高々に言います。

『さあさあ、よつてらつしゃい見てらつしゃい！ なんでも貫く最強の矛と、どんな衝撃も防ぐ無敵の盾！』

右手に矛を、左手には盾を。魅力的な言葉と共に掲げられたその一つの周囲には、自然と人だかりができたとか。

『ほら、今買つとかないと後悔するよー。』

行商人がそう言つと、人々は慌てて買ひ求めます。矛だけではなく、盾だけでもなく。人々は必ず、一品一対で買つていきます。何物にも負けない矛と盾。それらを両手に帰つてゆく人々の表情は、とても晴れやかであったとか。

ところが、そこにはどちらかしか買えない少女が一人。少女は悩み込んだ挙句、困つた末に言いました。

『それで、これはどつちが強いの？』

\*\*\*

2009年、日本。近代的な街並みには、けたたましい喧騒。

「峰原！」

自分を呼ぶ声がして、鋒原は後ろを振り返った。

鋒原 光16歳、高校一年生。

「よ。何やつてんだよこんなところで」

高校生男児には不釣合いな程に綺麗な肌、毛先が愛らしくハネた少し長めの茶髪。

そしてその顔立ちの良さは、どこを探しても並ぶ者無し。

「何つて……」

時を同じくして、やはりけたたましい街並みの中。

「かーおちやーん」

少し恥ずかしい呼び名に照れ臭そうにしながら、その女性は後ろを振り返る。

綾妻 香織、16歳。高校生活一年目の春。

「一人なんて珍しいね。何やつてるの？」

ショートカットの栗毛は愛らしそうに愛らしく、女性の中でも少し低めの身長にとても良く似合っている。しかししてその整った顔立ちは、周囲の異性の目を惹くには充分すぎた。

「何つて、」

「あー、デートかな？」

友人Aがそう言つと、香織は頬を赤くした。

「デートの待ち合わせだけど。健全な高校生男児なら当たり前じゃん」

光は、腕時計をトントンと指で叩きながらそう答えた。

「……、相変わらずお盛んなことで」

友人A、は呆れたように視線を逸らした。

「まあ、お互い楽しもつじやないか。お前も当然デートなんだよね？」

?

「バカな事言わないでよー！ そんな事する訳無いじゃんーー！」

香織は頬を真っ赤にして、デート疑惑説を否定する。

友人Aはそれが面白いといった風に笑つた。

「そんなに必死になつて否定しなくても良いのに」

「いきなりバカな事言つからでしょ！ 今日はただ参考書買いに来ただけだからー！」

「分かつてますつてば。香織がデートなんてする訳無いじゃん。頭のネジが数十本狂つてて男嫌いなんだもんね」

友人Aは香織の肩をポンポンと叩きながら、笑つた。

「……、ただちよつと苦手なだけだつてば」

鋒原 光16歳。その容姿に見合つた性格で、幼少の頃から異性に振られた事など一度も無い遊び人。

綾妻 香織 同い年は、小さい頃から数多に受け続けてきた異性からの告白を、一度もOKした事の無い鉄壁女。

交わる筈の無いこの二人が出会つのは、あとほんの少しだけ後の話で。

## 奇跡は意外と起につづる

「ねえ、今度どこか一人で遊びにいかない？」

鋒原 光は、こと女に関して遠慮を知らない。

「もう。私彼氏がいるの知ってるでしょ？」

何故なら、自分は女性から愛される人間だと理解しているからだ。  
「別に良いじゃん、遊びにいくくらい。何なら俺と付き合っちゃつても良いしさ」

「縦妻さん、俺と付き合つて下さい！」

縦妻 香織はなびかない。いかなる誘惑にも、どんな口説き文句にも。

「あ、あの……」めんなさい。付き合えません」

何故なら、興味が無いからだ。そいやつて異性を避ける内、いつしか本当に異性との付き合つが苦手になってしまったのも事実だ。

鋒原光と縦妻香織は、絶対に仲良くなれない。ましてや付き合つなど、想像の中で思い描く事すら難しい。

＊＊＊

「香織ー。」の前の塾の話、電話入れときなさいよ

香織の母、彩乃は言った。

「あ、そうだつた。ありがとお母さん」

香織は、大学受験に向け学習塾に通つ事を考え始めていた。そこで、前々から勧誘の電話の来ていた赤羽ゼミナールの体験講習を受ける事にした。

「お母さーん、赤羽の電話番号わかる?」

「その辺にパンフレットあるでしょ」

彩乃是電話台のあたりを指差した。

「ありがと」

香織は赤羽ゼミナールのパンフレットを左手に持ち、受話器を頭と肩で挟むと右手で電話番号をダイヤルし始めた。

一つだけ。ここで予め言わせてもらうと、香織は注意力の足りない人間ではない。普段からおつちよこちよいな部分がある訳でもないし、徹夜明けの朝でもない。

「もしもし」

電話に出たのは、若い男。その後に「赤羽ゼミナールです」と続かなかつたのを香織は少しだけ不思議に思つたが、そのまま続けようとした。

「あの、以前からお電話いただいていた縦妻ですが」

香織がそう言つと、電話の向こうの男は怪訝そうに「はい?」と聞き返してきた。

予想外の応答。瞬間香織は言葉を失い、頭の中で現状を理解しようとした。 とは言え、この状況で考えられるのは間違い電話ぐらい。

「あの……、赤羽ゼミナールさんですか?」

電話の向こうの男は、少し黙つた。

「……いえ、鋒原です」

電話の向こうの男、改め鋒原光は、億劫そうな声でそう言つた。しかし、この現状を飲み込むと光は、電話の声が若い女である事から興味を持ち直した。

「間違い電話?」

光は優しく、気さくに笑いながら話しかけた。

「そ、そうみたい……です。ごめんなさい」

「いやいや、全然。むしろ俺こいつって結構好き。どこの誰とも知らない相手と偶然関わりを持つつていうさ

言つまでも無いながら、光の場合のそれは異性相手に限る。

「は、はあ……」

香織は戸惑つた。ただ普通に間違い電話でしたで電話を切らしてくれば良いのに、相手の男が何故か話しかけてきたからだ。  
「どこに住んでるの？ 高校生？ あつ……いや、いきなりこんな事聞くのって失礼すぎるかな。はは」

「…………」

香織は無言を返した。そして、悪氣がある訳では無かつたが、突然今の状況が怖くなり、

「うひ、じめんなさい！ 間違い電話でした！」

そう言つて、一方的に電話を切つた。

「ツー……、ツー」

光の耳には、電話の機会音が寂しげに繰り返る。

「クソツッ！」

光は、苛立ちを隠す事なく受話器を放り投げた。

夜、鋒原家。

光はまだ、昼間の間違い電話の事が気になつていた。これも何かの縁、もし相手の女が美人だつたら取り逃がしたのは悔しそう。昼間はお互い何も知らなすぎたから警戒されたが、向こうの女も自分の顔を見れば仲良くなりたいと思うに決まつてゐる。光は、冗談でも何でも無く本気でそう考えていた。

「光一。電話空いたわよ」

鋒原光は麻雀に興味がある。

だからこの時、自分の携帯電話でなく家の電話を使うに至つたのは、自分の携帯電話は今麻雀のゲームを起動していたからである。そして、一つだけ。ここで絶対に言つておかねばならないのは、

光は香織の電話番号を控えていないこと。間違い電話であつたし、普通に生きていれば一度と関わる事も無いであろう相手。そんな番号を控えておくのも気持ち悪いと思つたし、別にその必要性も無かつたから。

だから、この結果は偶然である。

「はい。縦妻です」

一瞬、光は受話器を落としそうになつた。唇が痺れ、頬は震える。女友達の元に掛けるつもりだった光は、この信じられない出来事を夢か幻のものなのかとも。

光は、香織の元に間違い電話を掛けた。一体、どういう確率で奇跡が重なればこういう事が起こるのだろうか？　光は神という概念を特別信じている訳では無かつたが、この出来事を神の仕業で無いとするなら、宝くじで一等当てる方がどれほど簡単か。

「もしもし？　どなたですか？」

香織の声で我に返ると光は、小さく笑つた。

これが、峰原光と縦妻香織の初めての出会い。まだまだ互いの事など何も知らない、受話器越しに言葉を交わしてみただけ。

## 運命の糸は手繰り寄る

（縦妻……）

翌日、光は間違い電話の相手の事を考えていた。顔どこか、下の名前すら知らない。そんな相手の事を気に掛けるなんて、光は自分で自分の事をおかしく感じていた。

（……会つてみたいな）

それは、勿論恋愛感情からくるものではない。ただ、単純に胸をくすぐる好奇心。

（まず、市外局番をダイヤルしてないのに電話が繋がつたって事は、少なくとも市内に住んでるって事か？）

光は、北海道札幌市に住んでいる。

（札幌市在住、名字が『縦妻』……）

そう考えると案外絞られるように思われたが、そもそも年齢が分からぬ。それでは探す範囲が広すぎる。

（…………）

結局、もう一度電話してしまつのが一番手つ取り早い。今度は一応番号を控えてある。

（でも、それやつたら完全にストーカーだよな……。向こうは俺の事なんか何とも思つてないだろつし。顔見てもうえれば別だけど）

そうして、答えの出ない自問自答を繰り返しながら光は、その日眠りについた。

翌朝、光は学校に向かつて自転車を漕いでいた。朝の通勤ラッシュで道路が騒がしい時間帯だが、光はそういう喧騒が嫌いで普段からなるべく避ける様にしていた。

「いや、こるいるそーゆー奴！ どんな暑くてもワイシャツのボタ

ン一番上まで閉めてんだつて

信号待ちで自転車を漕ぐのを止めていると、すぐ傍の連中の会話

が聞こえてきた。

「大体、クラスに一人は『あー、こいつはワイシャツのボタン一番上まで閉めてそう』ってキャラの奴がいて、あとそれ以外にも一人ずつぐらいは人知れず一番上まで閉めてる奴がいるんだよな」

「あー、分かる分かる！ 大体そんな感じの割合に落ち着くんだよね」

（…………なんだこいつら…………）

光は、意味不明な会話で盛り上がりしている男子生徒一名を心底気持ち悪く感じていた。

「あと、女子はスカートとかね。たまにいるよなー、何が何でもスカートは膝下を守る奴」

（…………）

光は、とりあえず引き続き話に耳を傾ける事にした。

「実際これはほんどいねーけどな。せいぜいクラスに一人ずつくらい？」

「まあそれぐらいいれば良い方だろうな。俺らのクラスもみんなスカート短いし」

光は、それは別に良いだろと思つていた。

「あ、縦妻とか！ あいつは絶対スカート短くしたりしねーよな」

（ー）

「あー、縦妻。あいつ相当美人なのにスカート短くしてくれないからなあ。縦妻以外で誰か女子二十人ズボンにしても良いから縦妻はミニスカにして欲しい」

「いや、縦妻がミニスカートしてくれたんだつたら俺ワイシャツのボタン一番上まで閉めるよ」

そんな事を話しながら、二人の男子生徒は楽しそうに笑つた。

（縦妻……！ 高校生？）

二人の男子生徒は詰襟の学生服を着ている。

(くそ……、さすがに校章は見えないか)

ボタンに刻まれた校章までは見えなかつたが、香織の通つ高校では男子は詰襟だという事は分かる。

(この辺りで詰襟の高校つていうと、北高、古川、丘玉……)

信号が青になり、一人の男子生徒は自転車を漕ぎ始めた。

(縦妻……)

勿論、彼らの話している「縦妻」が間違い電話の相手と同一かどうかは分からぬが、とりあえず光は男子が詰襟の高校に通つている女生徒に絞る事にした。

## 問い合わせの答えは神のみぞ知る

「お前、縦妻つて奴知ってる?」

それ以来光は、仲の良い友達にそれとなく聞いて回るよつこして  
いた。今、同じ部活の東間という男に質問したのでハ人目。

「縦妻? ……縦妻つて、縦妻香織?」

光は、困った様に口を尖らせた。

「……下の名前は知らないけど、多分そいつ。……知つてんの?」  
部活動の帰り道、光と東間の二人は肩を並べて自転車を漕いでい  
た。

「ああ」

東間は頷いた。

「小中と同じ学校だつたしな。つーか、普通に有名人だぜ」「  
有名人?」

光は思わず繰り返した。

「ああ。超がつく程の美人で、小中学校と九年間通してもダントツ。  
今も普通に他校で話題になるつてさ。……つーか、お前が今まで香  
織の事知らなかつたつて事に俺は驚きだよ」

(…………)

光は無言を挟んだ後に、

「彼氏とかは?」

と、訊いた。

「あー、ダメダメ。香織はどうにもなんねーよ。今まで何十回告白  
されてきたのか知らんが、とにかく一度もOKしないんだから。今  
じゃもう、周囲も諦めてて手は出せないつてさ」

あの日、電話越しに言葉を交わした時の事が光の脳裏に蘇る。

光は不満気に眉間に皺を寄せた。

「俺でも? 無理?」

光は真顔でそう聞いた。すると東間は答えに困り、言葉を詰まら

せてしまつた。

「あー……。いや、多分無理だとは思つけど……お前も普通の奴じやないからな……」

光は真剣な目つきで東間を真つ直ぐ見据えながら、答えを待つた。  
「うー……ん、それはお前らが実際に会つてみないと分からないな」  
「…………」

そもそも、光は香織の事など何も知らない。だから、「もし俺が告白しても無理?」という質問は仮定中の仮定の話で、まだ光は香織の事など好きでも何でも無い。光を突き動かしているものは好奇心と、あの間違い電話に何かを感じたからだ。

『実際に会つてみないとわからない』

その東間の言葉が、いつまでも光の中に残つていた。

「…………そいつ、今どこ通つてんの?」

その光の問いに、東間は「北高」と答えた。

## 人の感情はねじれあう

今、鋒原光に正式的な彼女はない。とは言えそれは成り行きではなく、光が意図してそうしているのであって、その気になれば彼女の一人や二人すぐ出来てしまうだろう。そうしないのは、彼女を作つてしまふと色々と行動に制限が掛かるのと、他の女子の寄り付きが悪くなるからである。

しかしその結果、女友達の数は極端に多い。光は休日にはそれら一人ずつと遊びにも出掛けるし、互いに家を訪れたりもする。無論、これだけ異性から人気の高い光がわざわざ「美人じゃない」女子と仲良くする理由は特に無く、女友達のほとんどは他の男子生徒が羨む様な美人ばかりである。

その中の一人に、類家 真央という女がいた。

真央は光の友人達の中でも特に容姿が優れていて、学校が違う事もあり光は重宝していた。今でも一週間に一回は会っているし、光が家を訪れる回数も多い。……しかし、そもそもなるべく秘密裏に会うようにしている事と、学校が違う事とで光は真央が普段学校でどういう生活を送っているのかをほとんど知らなかつた。

類家真央は、言つてしまえば少し頭がおかしかつた。一人称が「まあ」である事は周囲から白い目で見られる原因となつていて、以前学級日誌に『魔法のエンピツ』と称して自身の恋愛談を書き記した時には学年中がその存在を知る事となつた。

そういう事をするのが「頭がおかしい」と判断する根拠なのではなく、「こういう事をすれば周囲がどういう反応をするか」を考えられないのが真央の決定的欠陥である。だから、友人と呼べる人間がほとんどいなくなつてから慌てて自身の行動を改めたものの、それは既に遅すぎて、今では同じように周囲から拒絶されている連中と仲良くするしか真央には残されていなかつた。

そんな頃に、真央は光と知り合つた。その頃には既に真央の外見

的性格には修正がかかるついて、またそういう真央の過去を知る機会も特に無かつたので、光は真央の内面についてしつかりとは知らぬまま付き合いを始めた。

変な行動をしない真央は一女性として素晴らしい魅力的で、光はとても気に入った。多くの時間を一人で過ごし、メールや電話などもどれだけ繰り返したか分からない。一人は正式に彼氏彼女の付き合いを交わした訳では無かつたが、やつてはいる事はそれとほとんど違い無かつた。

しかし類家真央は、自分が美人だという事を客観的に理解していた。

これが何よりも厄介であり、最大の問題である。長く一人の時間を過ごしてきた真央は、自身の容姿からして当然光も自分の事を愛してくれていると信じ切っていた。付き合わないのは、その方がお互い気楽に会えるからだと考えていたし、それらを疑う事など微塵も知らなかつた。

結果、自分は光の女友達の中でも群を抜いた存在であり、光に一番愛されているものだと信じ込んでいる。だから真央は、光が他の女性と会う事を許さない。それに対して怒る権利が自分にはあると考へているからだ。とは言え、実際に光が他の女子と遊んでいるのを目撃してもその怒りを爆発させる事は出来ない。そんな事をして光に嫌われてしまうのだけは避けなくてはならないからだ。

だから、そういう時は真央は張り裂けそうになるまで胸の底にストレスを溜め込み、一人でいる時に爆発させる。人形の類を引き裂いたり、兄が昔使っていた金属バットでコンクリート塀を力の限り殴り続けた事もある。

けれど、光はそれを知らない。光の認識では真央は、普遍的な性格をした美女なのである。

\*\*\*

「うそー!? そんな事あるのー?」

詩織は思わず声を大きくした。ある朝の教室、青川詩織と縦妻香織は机越しに向かい合つて話している。

「うーー、うん。この前ちよつとね……」

香織は少し恥ずかしそうに顔を俯かせる。

香織は、あの日の間違い電話の事を友人の詩織に何となく話してみていた。ただ、世間話をするようなつもりで。

「すつゞーーー。そんな事つてホントにあるんだ」

詩織は目を丸くして驚いている。

「えつ、その相手の人の名前とか聞いてないの?」

詩織がそう聞くと、香織は恥ずかしそうに口を尖らせた。

「あーーーえつと、確か峰原……って言つてた。多分だけど……」

「ええー!? 鋒原つて、峰原光くん! ?」

詩織は再び声を張り上げた。

「えつーーー、下の名前は知らないけど」

「うそーーー、その人超有名人だよ。ジャニーズ顔負けのイケメンだつて嘘話してるんだから」

「いや、顔とかは別に……ビリウスでも」

香織は顔を赤くした。

「なーーに言つてんの。そんな事があつたんなら、もしかしたら光くんも香織の事意識してくれてるかもよ?」

「ちょつ……! だからそんなんじゃ無いってばーーー!」

香織は怒りすら感じさせる程に否定した。

「まあまあ。香織も男嫌いを直すチャンスじゃん。光くんに仲良くしてもらひなさいって」

そう言つて詩織は笑いながら香織の肩を叩いた。香織はその手を

叩き落とすかのように払い、詩織は今度は香織の腰回りに抱きついてじやれ合う。そして、一人は馬鹿馬鹿しくも楽しそうに笑っていた。

そんな一人の会話を、真央は教室の隅から睨む様にして見ていた。

## 偶然は一人を引き寄せる

五月二十日、夜。光は自宅で携帯の液晶画面に向かっていた。

各学校には、学校公認の公式サイトの他に、非公認に経営されるクラスホームページというものが必ず存在する。そこにはクラスの生徒達のプロフィールや日記が掲載されており、クラス内、またはクラス同士の交流の為に利用されている。

同時に、それはまた他校の生徒や一般人も自由に閲覧出来る為、本名をフルネームでは記載せずに下の名前だけ、もしくはニックネーム等を用いている場合もある。

……とは言え、一学年320名、内約160名の中に『縦妻香織』といつ同姓同名の一人がいたりなんて事は無いだろうし、また『香織』と下の名前だけの場合でも、せいぜい該当者は一人や三人程度だろう。

光が、学級サイトを一つずつチェックし始めてから約二十分。札幌北高校二年七組。その、在籍生徒プロフィール一覧。

『32 たてづま かおり』

そのクラスでは、平仮名ながらもフルネームを記していたのがとても良かった。漢字で下の名前だけ書かれるよりはこちらの方が断然良い。

（……たてづま、かおり……）

光は、プロフィールへのリンクをクリックした。

【HN】 かおり

【趣味】 音楽

【職業】 女子バスケットボール部のマネージャー。全然役に立てな

い……。

【とにかく主張したいこと】 もつちよつとで大会！ ほんのちよつとでも役立てるようにがんばりたい！！

それは、良く言えば要点がまとまつていて、悪く言えばただ簡素だった。

日記ページの生徒名一覧から香織の項目をクリックしても、何も表示されない。恐らく、このプロフィールもクラスメイトに頼まれてさつさと作ったものなのだろう。光はそう考えた。

（こういう事にはあまり興味無いのか。それにしても、女バスのマネージャー……）

男子バスケットではなく、女子バスケット。光はそれに対しても常に好印象を抱いた。

（……縦妻香織、か……）

＊＊＊

体育館の広い天井に、バスケットのボールが浮かぶ。それは綺麗な弧を描いて空を飛び、そのままバスケットのゴールのネットを揺らした。

「ナイスショーーー！」

「コートの外の一年生達が館内に声を響かせる。

「調子良いな、光」

東間は光の頭を叩いた。

「大会前だからな……」

光は、そう言つとあつという間に東間のマークを引き剥がした。フリーになつて、味方からバスを貰つて、打つ。その一連の流れからは、表現し難い気迫が感じられる。

「……やつぱレギュラーともなると『』の入り方が違うな

「別に……」

光のそっけない応答に、東間は小さく笑みを浮かべた。

「そーいや、一回戦の相手どこだつたつけ？」

「……北高」

光は、マークマンの東間と向かい合いながら答えた。

「それは、お前の気迫と何か関係あるのかな」

東間は、右手でバスを受け取った。その次の瞬間にはもう左手が添えられ、流れるかのようにしてショートを放つ。

光は高く飛び上がり、そのボールを豪快に叩き落とした。声援を送る一年生達の方から、わっと歓声が湧き上がる。

「……別に、何も」

## その日は着実に近付いてくる

「ウツソ。今年つて男女同じ会場でやんの？」

東間は驚いたように田を丸くした。

部活終わりの帰り道、光と東間はいつものように肩を並べて自転車を漕いでいる。いつものように、元気のままには光が女友達と会わない田の事に限るが。

「ああ。と言うか、隣接してる体育館だけどな」

「…………。ふーん、それであんなに気合いで入ってたわけね」

東間は可笑しそうにやけてみせた。

「別に……」

光は目線を逸らした。

「まあ、じゃあとにかく当田はなるべく俺の傍にいりよ。香織を見かけたら教えてやつから」

「ああ」

光は、なるべく無関心を装いながら答えた。……高体連まで残り一週間。

\*\*\*

「か、香織ちゃん。これ、補充お願ひ

汗が垂れる髪、一目で分かる程に濡れたユニフォーム。

「あ、はい！ すいません」

北高女子バスケットボール部二年、西本はポカリのタンクを香織に手渡した。

それを受け取った香織は急いで水飲み場の方へと走り出し、その背中が見えなくなつてから、西本はその場にどさりと崩れ落ちた。

「に、西本さん大丈夫ですか？」

一年生が傍に駆け寄る。

「……あ、い、いや全然。単純に疲れちゃつただけ」

西本は笑顔を作り、平氣である事をアピールした。

「……ちょ、ちょっと氣合い入りすぎ……」

「彩……」

三年、村山 彩子はまるで死人のように西本の横に倒れ込んだ。

「……そりや氣合いも入るよ。最後の大会だもん」

「そ、そななんだけね」

彩は仰向けになつて笑つた。

「……私達、恵まれてるよね」

少しだけ呼吸の落ち着いた西本が、唐突に切り出した。

「どうしたの？ いきなり」

彩子は体を僅かに起こした。

「……親とか先生たちとか、本当にたくさん応援してもらつたなー  
つて……」

「うん」

恐らくは汗だらうが、西本の田元から垂れる水滴が彩子には涙にも見えた。

「支えてくれる一年生達もいるし、マネージャーもいる」

「……うん」

体育館の扉を開いて、香織が駆け込んでくる。

「これで頑張れなきや、嘘だよね」

西本は立ち上がり、崩れたユニフォームを整えた。

「……うん」

高体連まであと六日。

## そしてその日は訪れる

「あら。鋒原さんお出掛け?」

爽やかな日差し、時折吹く心地良い風。

光の母、栂は外行きの装いで駅へと向かっていた。

「ええ、ちょっと光の応援に。今日部活の大会なもので……」

栂は笑顔で答えた。

「まあ。それは頑張つて応援しないと」

「いえ……、全然そんなじやないんですけど、今年はなんとかレギュラーになれたらしいのでそれならと思つて」

栂は遠慮がちに話した。

「どこの高校に通つてるんでしたつけ? 光くん」

「開清高校です。光の話では、バスケ部も全然強くはないらしくて。まあ、あの子がレギュラーになってしまふんですから」

栂が冗談交じりにそう言つと、一人は笑つた。

「頑張つてくださいね、応援。私も勝てるよう願つてますから」「ありがとうございます」

栂が軽く頭を下げる。一人はその場で別れ、栂は再び駅へと向かつた。

\*\*\*

「いいか。今日は三年生にとつて最後の大会になる」

札幌北高校女子バスケットボール部、監督柏木。彼女達は試合前、最後のミーティングを行つていた。

「今まで、皆本当に頑張つてきたと思つ。三年生は一年間、一年生は一年間」

西本や彩子ら部員は皆真剣な眼差しで柏氣の話を聞いている。

「でも、そこに差なんて無い。一年生も一年生も三年生も、頑張つてきた期間が違うから『今日』に対しての意気込みもそれ相応にしなくちゃならないなんて事は無いはずだ。スタメンはプレーで。ベンチに入れた選手はいつでも出られるような気構えを。一年生は、今日は裏方の仕事になってしまつが常に何か仕事が無いか気を配り続ける。全員で、一つになつて勝利を掴もう」

話が進むに連れ、体育館の熱気が膨らんでゆくように感じられた。「そして、全員。この大会が終わつた後は暫く出せなくなつても良いから今日はとにかく声を出せ」

「はい……」

部員達は張り裂けそつた程の返事を返した。

「……マネージャーも。今日は頼むよ」

「はい！」

その中には、当然香織も。

「よしここひーーー！ 絶対に勝つ、その気持ちを最後まで忘れるな！」

「パン！」 柏木は手を叩き、選手達をコートへと送り出した。

\*\*\*

そして、隣接するもう一つの体育館。

男子の声は体育館中に充満し、その熱気がこれまでの激戦を物語る。

既に試合を終えた選手達は、満面の笑みを浮かべていたり、涙を膝に埋めていたり。

それでも、そんな選手達の事情などお構いなしに、試合は次々と進んでゆく。

開清

4  
3

108

札幌北

また一つ、選手達の足跡が刻まれてゆく。

そしてその日は区切りとなつた

何も出来ない。

リバウンドも取れないし、ショートも打てない。ドリブルでティフェンスを抜く事も出来ないし、ブロックも出来ない。

光は、かつてない程の絶望感と自らの無力さを味わっていた。北高と開清、両校の間にさほど大きな実績の差というものは存在しなかつたが、その実力差は歴然だつた。

（くそつ……！）

光は、味方からバスを受け取ると半ば強引にショートの体勢へと入つた。

弧を描き、ゴールへと向かう……はずのボールは、敵がブロックせんと伸ばした右腕に阻まれる。

（…………！）

光の場合は、運も悪かった。光はまだ一年生という事もあり、レギュラー五名の中では実力不足も否めない。片や、光のマンツーマンの相手は北高の主将でありエース。その差は素人目に見ても歴然だつたし、光自身も理解していた。

かつてない屈辱、無惨なゲーム展開。

けれど、光が顔を上げられなかつたのは……。

綻妻香織が、自分の試合を見ているかもしねれない。自分の高校の勝利を願いながら、この試合を見に来ているかもしねれない。

『開清の11番の人、情けないなあ』

そんな風に思われているかもしねないと思うと、光は一度と顔を上げる事は出来なかつた。

自分のこんな情けない姿を、縦妻香織に見せたくは無かつた。  
……北高のエースを相手に張り付き続けた脚はもはや限界で、そして光はベンチに下がつた。

「……俺、不真面目だつたよな……」

光は、東間と一人で階段に座り込んでいた。

「……。別に、普通だろ。お前は頑張つた方だよ」

東間は光の方に顔を向けたりはせず、そのまま答えた。

光は下げた頭を上げようとはしない。だらりと垂れた前髪が、その顔を覆う。

「不真面目だつたよ、俺。……『テートだからつて練習サボつたり、大会前だけ変に気合い入れたり』

光がそう言つと、東間もまた何も言えなくなつてしまつた。

「……俺、これからはもう少し真面目になろうと思う」

東間は驚いた様に顔を上げた。光の言葉があまりにも意外だつたから。

光は悔しさの中に決意を秘め、ゆっくりと顔を上げた。

「……このままじゃ、縦妻香織にも顔向け出来ない」

体育館の振動が、壁を伝つて背中に届く。

「……ああ」

東間は少しだけ笑つて頷いた。

\*\*\*

午後一時四十分。現地解散となつた光と東間は、体育館前から出ているバスに乗り、それが動き出すのを待つていた。

「来年、また頑張ろう。それまでには俺もレギュラーに入れれるようにする」

「……、おう」

二人の表情は、先程と比べるとほんの少しだけ明るく、気持ちは既にこの先へと向いているようだつた。……もちろん、それは一人がそうあらうという理想であつて、実際にはまだ直前の屈辱が残つている。

「……」

光と東間は何も言わずとも会話を止め、目を瞑つた。

『間もなく出発します』

車内にアナウンスが流れ、扉が閉まり掛ける。

だが、急いでこちらに走つてくる人がいる事に運転手が気付き、

閉まり掛けた扉はもう一度開いた。

「す、すいません……ありがとうございます」

綾妻香織はそう言つて、慌ててバスへと乗り込んだ。

## 名優尻向けてもそれは華

高々と空を舞つたボールは、惚れ惚れしてしまつ程に美しくゴールのネットをすり抜ける。

「マジかよ……開清つてこんなに強かつたか！？」

「北高相手にボロ勝ちじゃねーか」

開清の圧倒的優勢を物語るダブルスコア。北高の選手達は皆息を切らして疲れ果て、やがて膝に手を付き足を止める。

マークマンの上から叩き込む豪快なダンク。整つたショートフォームから放たれるシューート。開清は、北高に対して大差で勝利を収めた。

「光くん！ おめでとう！」

「香織！」

光の元に駆け寄つてくる女生徒。それは、あの縦妻香織だった。

「おめでとう！ ほんとは北を応援しなきゃダメなんだけど……光くんが勝てて良かった」

香織は恥ずかしそうに、もじもじと言葉を詰まらせながら光の勝利を喜んでいる。

「かつこよかつた……本当に」

「香織……」

二人は、必然的に見つめ合つた。最早余計な言葉など必要とせず、次第に一人の距離は近付いてゆく……。

「光、光！」

誰かが自分を呼んでいる。光は戸惑いながらもゆっくりと目を開けた。

（……いつの間に……）

着慣れたいつものチームジャージ。脚に残つた試合の疲労。光は

バスに乗った直後から深い眠りについてしまっていた。

「お、おい光！ 起きろって！」

もう起きているというのに、東間は光の体を揺らし続ける。バスはちょうど停留所の前で停まっており、揺れの無い落ち着いた車内が光の睡眠欲を促進させる。

「……もう起きたつーの……」

光はそう言って、鬱陶しそうに体を背けた。敗戦のショックと、純粹な疲労とで光の臉はまだ重い。

「良いから……起きろってば！ 縦妻香織がいるんだよ！」

東間は死体のような光の体を重たそうに引き上げる。しかし東間の言葉がしつかりと頭に行き届くと、光はそんなものなど必要無いとばかりに飛び上がった。

「外！ ほら、今あそこ歩いてる……」

運転手が再びアクセルを踏み、バスが微かに動き出したのと同時に東間は窓の外を指差した。

春風になびく、透き通った栗毛。

それは小柄な体に信じられない程に似合つていて、気が付けば、光は香織の後姿に見惚れてしまっていた。

それでも、バスは無情に走り出す。あつという間に加速して、香織の姿は見えなくなつた。

「……顔、見えた？」

東間は窓の外に向けた目をそのままに聞いた。

「いや、後姿だけ……」

光もまた、呆然と外を眺めたまま答えた。

車内から見える景色は次から次へと移り変わり、それはそのまま光と香織の距離を遠ざけてゆくようだった。

「でも……うん」

光は窓から体を離し、姿勢を整えて椅子へと座り直した。

「何？」

「いや……、何でも無い」

その顔はとても晴れやかで、それを見て東間は、一人の将来を直感的に感じていたとか。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9914g/>

---

矛盾恋愛

2010年10月17日03時44分発行